町かどのジム

エリノア＝ファージョン作　松岡享子訳

昭和四十年十二月一日 初版発行©
昭和四十四年十一月二十日 十三刷発行

NDC 933

エリノア＝ファージョン
町かどのジム
新しい世界の童話シリーズ・1

訳者の了解により検印廃止

訳　者■松岡享子
発行人■古岡秀人
編集人■石井和夫

本文印刷■信毎書籍印刷株式会社
オフセット印刷■株式会社恒陽社印刷所
製本■株式会社国宝社

発行所■株式会社学習研究社
東京都大田区上池台4の40の5
振替東京142930

G 024-301
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

定価 四〇〇円

■この本についてのお問合せ，製本上のミスなどがありましたら，下記宛にお知らせ下さい。
学研「営業総務部サービス課」児童図書係　東京都大田区仲池上1の17の15　Tel.03-753-753.

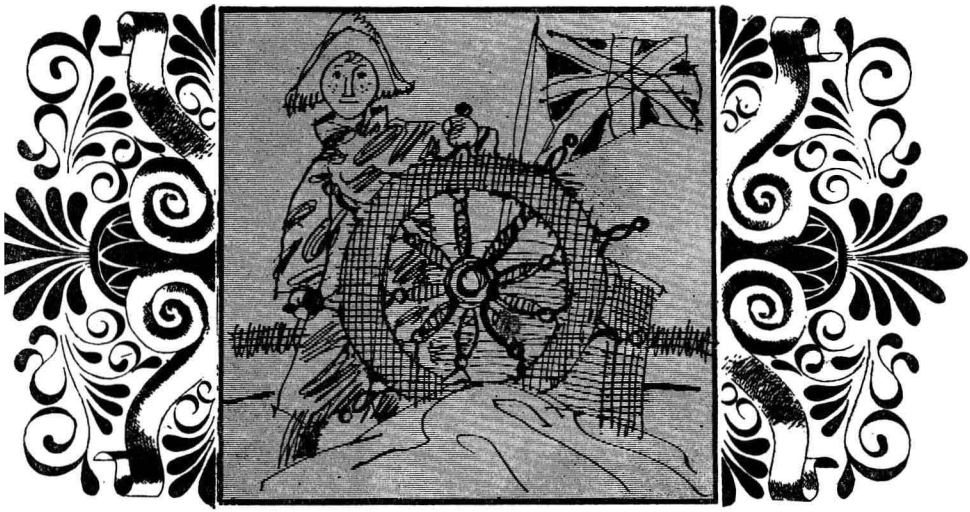
かどかどのジム

ノア=ファージョン作

松岡享子訳

三芳悌吉画

JIM AT THE CORNER



Jim At The Corner

町かどのジム　もくじ

デリーとジム　5

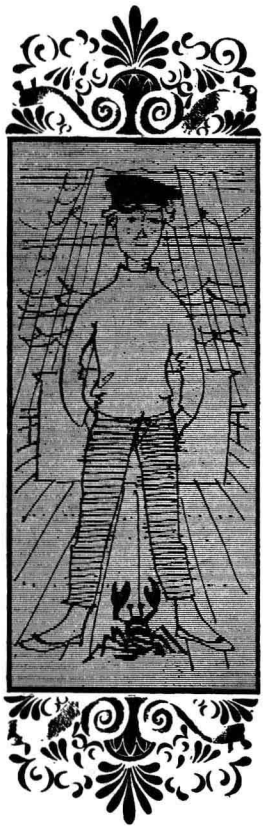
男の子のパイ　11

みどり色の子ネコ　27

ありあまり島　49

ペンギンのフリップ　67

91 九ばんめの波
109 月を見はる星
131 大海へビ
149 チンマパンジーとポリマロイ
172 ジムのたんじょう日



デザイン・江口　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●編集委員

<50音順>

独・北欧児童文学翻訳家　大塚勇三

青山学院大学講師
英米児童文学翻訳家　神宮輝夫

国立音楽大学教授
フランス児童文学翻訳家　塚原亮一

慶応義塾大学助教授
英米児童文学翻訳家　渡辺茂男

●訳者のご紹介

この本を訳された松岡享子先生は，1935年兵庫県に生まれ，神戸女学院大学英文科，慶応義塾大学図書館学科をご卒業ののち渡米，ウエスタンミシガン大学大学院で児童図書館学を学ばれ，ボルチモア市の公共図書館におつとめになりました。現在は，大阪市立中央図書館で子どもたちにせっしながら，児童図書の研究と普及につとめるかたわら，『しろいうさぎとくろいうさぎ』（福音館）など，幼児向き絵本の飜訳のお仕事をしていらっしゃいます。

デリーとジム

町かどのポストのそばに、ミカンばこがひとつおいてありました。そこに、ジムがすわっていました。

朝もばんも、夏も冬も、デリーがものごころついてからというもの、ジムはいつだって、そこにいました。生まれたときから、ずっとそこにすわっていたにちがいありません。といっても、デリーが生まれたときから、つまり八年まえからです。

ジムのいる通りには、赤れんがでできた、せいの高い家がならんでいました。そのなかの一けんに、デリーはすんでいました。朝、デリーがさんぽにでかけるとき、ジムはきまって、あのかどのミカンばこの上にすわっています。さんぽからか

えってくるころにも、やっぱり、もとのところにいます。

デリーは、ジムが、ひるまだけでなく、夜なかもずっとそこにいて、通りの番をしてくれているのだと思っていました。ジムさえかどにいてくれたら、通りへ出ても、うちの中にいるのとおなじようにあんしんでした。

そのジムというのは、どんな人だったでしょう。

もう、としをとっていましたから、かみは白くなっていました。きぬのようにつやのあるしらがでした。顔もつやつやしていました。でも、このほうは、みがきあげた茶色のテーブルといったかんじでした。目はきらきらして、青いガラス玉のようでした。

手はごつごつとふしくれだっていました。ジムはその手を、たいていステッキの上にかさねていましたが、ステッキがふとくてみじかいので、ジムがそれをりょうひざのあいだに、どっかとすえたところは、まるで三本あしのこしかけのようにみえました。

口には、いつも、パイプをくわえていました。中につめるタバコが、ぜんぜんないときでも、パイプは口からはなしませんでした。口もとは、いつもにこにこわらっていて、目は、いつもきらきらかがやいていました。そして、デリーが、「こんにちは、ジム。ごきげんいかが？」ときくと、「わしか？　わしゃ、げんきなもんさ。そういうおまえさんは、どうなんだい？」というのでした。

デリーは、ジムがきているもののことも、よくしっていました。ジムよりさきに、しっていたことだってあります。というのは、いまジムがかぶっている、ツイードのぼうしも、ジムがはいている、ねずみ色のフランネルのズボンも、もとはデリーのおとうさんのものだったからです。それに、ジムが、さむいときにはめている手ぶくろは、デリーのおかあさんが、ジムにあんであげたものでした。

デリーの家のとなりには、トランペット少佐という人がすんでいましたが、ジムは、この人から、茶色のジャケツと、上等のパイプをもらっていました。

ジムと、はんたいがわの家のパターンさんのおくさんからは、海のような、み

どり色のワイシャツをもらっていました。

むかいの家にいる、ポリーという女中さんからは、海のように青いハンケチをもらっていました。

このように、通りにすんでいる人は、みんなして、ジムのめんどうをみていたのです。

ジムは、デリーのおとうさんがとおりかかると、きまって、ちょっとぼうしに手をやって、「おはようございます、ベインさん。ちょうだいしたぼうしです。」と、いいました。

トランペット少佐がとおるときは、パイプをゆびでポンポンとたたきながら、「おはようございます、少佐。ちょうだいしたパイプですよ。」と、いいました。

そのほか、この通りにすむだれがとおっても、ジムは、うれしそうに顔をほころばせて、「ちょうだいした長ぐつですよ、だんな。」とか、「ちょうだいしたくつしたでさあ。」とか、「ちょうだいしたえりまきですよ、おじょうさん。」とか、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いうのでした。

そんなわけで、ジムは、この通りにはなくてならぬ人でした。ここにすむ人みんなが、そう思っていました。だれでも、このかどをまがるときは、まるで、じぶんの一部が、ジムといっしょに、ミカンばこの上にすわっているような気がするのでした。

男の子のパイ

ジムは、だれにでもすかれていました。

でも、ジムを心からあいしていたのは、なんといっても子どもたちでした。じぶんたちが生まれるずっとまえに、ジムが船のりだったことは、子どもたちの心をひかずにはいませんでした。

ジムは、地上のどんな場所のこともしっていましたし、天上のどんなお天気のこともしっていました。あくる日のお天気をいいあてることができましたし、また、そのいいかたがすてきでした。

たとえば、こんなふうです。

「あらしが、やってくるぞ！　ああ、そういや、ケープホーンの沖あいで、大しけにあったときのことを思いだすなあ。あんときゃ、わしは、ゆり

木馬号の第一水夫だった。」とか、「とうとうしもがやってきたな。あすになりゃ池に氷がはって、スケートができるぞ。わすれもせんが、ゆり木馬号は、ニューファウンドランドの沖で、氷山にぶっつかってなあ。」とか、「もうじき、風がふきはじめるぞ。さ、デリー、風のこないうちに、はやくうちへかえりな。もし風がおまえをとっつかまえにきたら、うんと足をふんまえていろよ！」などというのです。

「どうして、ジム？」と、デリーはききます。

「どうしてって？　それじゃおまえ、あのプラタナスの木のてっぺんへ、ふきあげてもらいたいっていうのか？　わしは、まえに、木のてっぺんへふきあげられたことがあるがね。」

「えっ、ジムみたいに大きい人が？」

「ああ。けど、わしがおまえくらいの、ちっちゃな子どもだったときさ。それに、そのときゃプラタナスでなくって、ニレの木だった。その木にゃ、まっ黒いミヤ

マガラスのすがいっぱいあって、カラスどもが、いっせいにカアカアわめくもんで、わしは、どうなることかと思ったよ。」

「そのときのこと話してよ、ジム！」

ジムはわきへよって、はこのすみに、すこしばかり、すきをつくってやりました。そして、デリーがそこへよじのぼって、足をぶらんぶらんさせてすわると、話をはじめました。

ジムの話

わしがまだ小さかったころの、ある

夏のことだ。わしは、マメ畑をあらしにくる鳥の見はりをしていた。そのマメはウシのえさにするもので、もし鳥にくいたいほうだいくわせたら、冬になって、ウシのたべる分がなくなってしまう。

そこで、わしは、夜あけから日のくれまで畑にすわって、鳥がマメをぬすみにくると、ガラガラをならしては、大声でどなった。

とんでけ、とんでけ、悪党め、
さもなきゃ、パイにしてくっちまうぞ！

まあ、そのことばの意味がわかったんだか、わからなかったんだか、どっちにしろ、やつらはそれをきくと、パッととんでにげた。

すると、わしはいくさにかったえいゆうのような気がしたもんさ。カラスやムクドリが、わしがたたかいをいどまねばならん敵というわけだ。

敵はすぐにげたが、にげたと思うと、またすぐもどってきた。いつまでたっても、マメをぬすんじゃいかんということがわからんらしい。なんで、そうたびたびやってくるんだか、わしにはさっぱりわからなかった。よっぽど、やむにやまれぬりゆうがあったにちがいない。こわいのもわすれるくらいだからな。

だが、やつらがわしをなんとも思わず、なんべんおっぱらっても、またもどってくるのをみると、わしゃはらがたった。そこで、ガラガラをならしては、あの歌をうたった。そんなわけで、その夏じゅう、鳥とわしは、おたがいをかたきにしておった。

なかに一わ、わしがガラガラをならそうが、歌をうたおうが、しらん顔をしているカラスがいた。まっ黒で、むれのなかでいちばん大きいやつだった。そいつは、ゆうゆうとほしいだけマメをくって、わしが、もうちょっとでつかまえるくらいそばまでいかんと、にげなかった。

もしつかまえたら、うちへもってかえって、おかあさんにいって、きっとパイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com